

<h1 style="font-size: 2em;">指導資料</h1> <p>鹿児島県総合教育センター 令和 4 年 4 月発行</p>	<h2 style="font-size: 2em;">幼稚園教育 第 22 号</h2>	
	対象 校種	幼稚園 小学校 特別支援学校幼稚部



幼児が主体的に関わる環境の構成

幼児が、興味・関心をもって自分から関わり、夢中になって活動する環境の構成を行うためにはどのような考え方が必要なのだろうか。幼児教育における環境の構成の基本的な考え方と進め方について、幼稚園教育要領解説を基に紹介する。

1 はじめに

幼稚園教育要領（文部科学省 H29.3）には、幼児期の教育における環境の構成について次のように示されている。

第 1 章 総則 第 1 幼稚園教育の基本¹⁾

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。

…中略…

その際、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。

（下線は筆者による）

各園において、幼児が夢中になって遊んでいる様子を思い浮かべてみよう。「なんだろう。」「やってみたいな。」「いいこと考えた。」「おもしろいこと思い付いた。」「すごいな。」「ねえねえ聞いて。」「明日もやりたいな。」などとつぶやきながら遊びに没頭している姿が浮かんでくるだろう。これらのつぶやきは、幼児の主体的な活動の姿であり、興味や関心をもって身近な環境に主体的に関わり、気づきや発見、試行錯誤などを繰り返しながら対象と関わるなど、自発的な活動としての遊びから生じる。このような自発的で直接的、具体的

な体験を通しての遊びは、一人一人の発達を促し、幼児期の資質・能力を育成するために必要な学びとなる。そこで、幼児が興味・関心をもって自発的に関わりたくなる環境の構成について、幼稚園教育要領解説を基に、鹿児島大学教育学部附属幼稚園の実践や事例、「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（文部科学省）」での事例などを参考にしながら、基本的な考え方や進め方を紹介していくこととする。



2 幼児教育と環境

幼稚園教育要領解説では、「幼児期の教育においては、幼児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない。」とある。その際、教師は、「幼児が環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするなどの「幼児期の教育における見方・考え方」を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めること²⁾とあり、環境を通して行う教育の重要性を明記している。

そこで、教師は幼児が自ら興味・関心をもつ

¹⁾ 幼稚園教育要領 p.5

²⁾ 幼稚園教育要領解説 p.28

て環境と関わり、その中で様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わう体験を重ね、発達を促していくように、様々な視点から環境を構成することが必要となる（表1）。

表1 幼児の発達を促す環境構成の視点例

視 点	内 容
物的	遊具, 素材, 道具, 教材・教具など
人的	教師, 友達, 家族など
自然的事象	季節, 動植物など
社会事象	世間のニュース, 流行, 情報など
空間的条件	場所(広さ, 高さなど), 外遊び, 室内遊びなど
時間的条件	季節, 期, 1日の流れ など

鹿児島大学教育学部附属幼稚園の実践より

また、これらは、教師主導の一方的な保育の展開での環境構成ではなく、幼児一人一人が主体性を発揮して活動できるような幼児の立場に立った環境構成であることが大切である。

3 計画的な環境の構成

それでは、幼児が自ら興味・関心をもって環境と関わり、発達に必要な体験を重ねるためにはどうしたらよいただろう。ただ自由に遊ばせていても、幼児期の発達に必要な体験を重ねていくことはできないであろう。幼児が必要な体験を積み重ねていけるように、教師は、幼児の発達の道筋を見通して、一人一人の興味や関心を大切にしながら、それぞれの時期に必要な環境、また教育的に価値のある環境を考慮（図1）して意図的に配置していくこと、すなわち計画的な環境の構成が必要となる。



図1 教育的価値を考慮する際の視点例

そこで、計画的な環境を構成するために必要なことや大切なことを以下に述べる。

(1) 状況の変化を予想する。

「環境の構成を計画することは、園生活の流れの中における状況の変化を予想すること」³⁾とある。

園生活の中で、幼児の活動の状況は変化していく。教師は、生活の中での幼児の活動の場所、場面、情景、季節の変化などを具体的に思い描きながら、幼児の主体的な活動のために必要な環境の構成や環境との出会わせ方、活動の流れなどを考えながら、状況の変化を予想していくことが必要となる。その際、指導計画の中に、環境構成について、その都度書き加えたり、適宜見直したりして、全体を見通しながら意図的・計画的に進めていくようにする。そうすることで、様々な遊びや状況の変化の中でも、臨機応変に対応することができる。

(2) 活動の展開と発達の方向を見通す。

「活動の展開と発達の方向の双方を視野に入れることで、初めて教育的に価値のある環境を考えることができる」⁴⁾とある。

幼児一人一人が、これからどのような過程を経て発達していくのかを見通し、望ましい方向に向かって発達していくためにどのような体験が必要かを考慮しながら活動を展開していくことが大切である。そのために、環境がもつ様々な要素が、遊びを通して幼児の発達にどのように影響し、それをどのように促していくかなどの環境と幼児の発達との関係を考えたり、園全体で共有したりすることが必要となる。

(3) 発達に必要な体験を踏まえた環境の再構成を行う。

教師は、幼児の興味・関心、発達に必要な体験等を考慮しながら環境を構成するが、幼児の活動が、教師の予想とは違った展開になる場合や、新たな活動が展開する場合もある。

「教師は保育の中で臨機応変に環境の再構

^{3) 4)} 幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開 p. 21

成をする必要がある。」⁵⁾とある。

幼児の活動によって起こる様々な変化を把握しつつ、活動の発展を期待しながら、幼児の発達にとって必要な体験のある新たな環境をつくり直し、意味のある状況を再構成していくことも必要となってくる。

4 環境の構成の進め方

前項までで述べてきたことを「環境構成の進め方」として図2に一連の流れとして示す。

幼児の生活の姿から、望ましい発達の援助に向けた教師の思いや願いを確認し、「長期の指導計画」と「短期の指導計画」のねらいや内容、幼児が関わることで展開する活動を予想しながら環境の構成を進める。そして、実践と評価を行う中で、生活の流れや幼児の姿に応じて環境を再構成し、次の計画作成や環境構成につなげていくようにする(図2)。

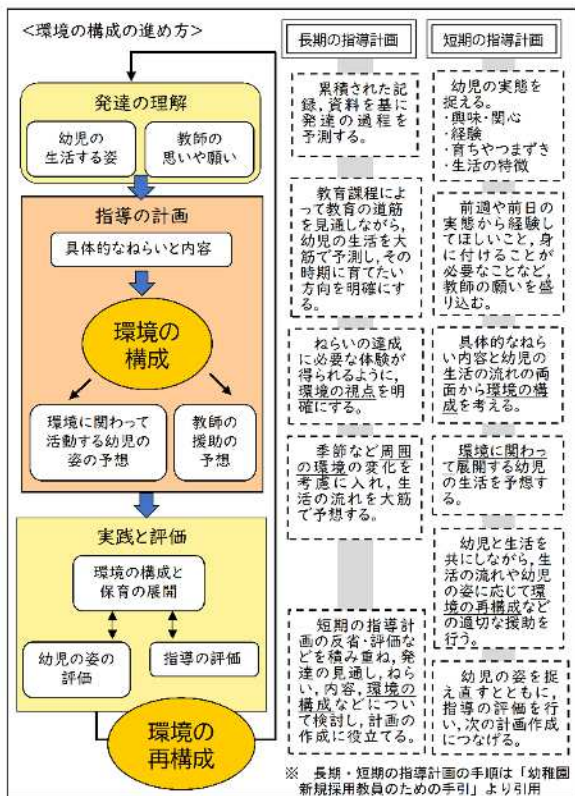


図2 環境の構成の進め方

5 環境構成の実際

幼児が主体的に環境に関わり生活を展開していけるように、幼児の生活する姿や発達の段階を考慮した環境構成の実際を紹介する。

(1) 興味や欲求に応じた環境

新しい環境に慣れて徐々に好きな遊びを始めた幼児の生活の姿から、今、何に興味があり、どのような欲求があるのかを捉えて環境構成を行った事例である。ここでは、砂場遊びに夢中になっている幼児の姿から、砂山にトンネルをつくりたいという欲求を捉え、教師の思いや願いを含ませながら、それらの活動を十分にできる環境構成を進めている(図3)。

事例1⁶⁾ 年少児4月「砂場遊び」

<幼児の生活する姿>
新しい環境にも慣れ始め、徐々に自分の好きな遊びを始めた子供たち。室内ではぬり絵やおままごとごっこをして遊ぶ姿が見られ、園庭では、砂場で砂山づくりが始まり、その山にトンネルをつくりたいという子供が出てきた。スコップを使って砂山に穴を開けようとするが、砂がさらさらしてすぐに山が崩れてしまう。

トンネルをつくりたい。
砂をかけてみよう。
(トンネルをつくるには)お山を固くしないといけないんだよ。
(砂山に)お水をかけたらどうかな。

<教師の思いや願い>
○ どのようにしたらトンネルをつくるのができるのか気付いてほしいな。【気付き】
○ 道具を使って自分がつくりたいものをつくる経験をもっと味わってほしいな。【主体性】

<環境構成と教師の手立て>
○ トンネル型の道具や雨どいを砂場の近くに置く。
○ 子供たちの言葉を繰り返して周りに伝える。
○ 偶然によって生まれた形や遊びを見守る。

図3 興味や欲求に応じた環境の構成例

(2) 新しい出会いがある環境

今まで出会ったことのない新たなものとの出会いは、幼児の発達にとって大きな意味のある体験となる。例えば、身の回りの生き物に興味をもつ幼児、気になっても関われない幼児、全く気付かない幼児と様々である。そこでこの事例では、教師が、生き物に興味のある幼児と一緒にオタマジャクシを捕まえて、教室で見ることができるよう飼育ケースを準備したり、近くに図鑑を置いて調べられるようにしたりと、意図的に環境を構成している。今まで関心のなかった幼児の興味や関心が広がり、発見や驚きのある新しい出会いにつながる。(図4)。

⁵⁾ 幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開 p. 21

⁶⁾ 鹿児島大学附属幼稚園

事例2⁷⁾ 年長児4月「オタマジャクシ」

<幼児の生活する姿>

不安と期待を抱きながら年長に進級し、新しい友達にもだいが慣れてきた様子の子供たち。部屋ではごっこ遊びや積み木遊び、制作遊びなどをしており、園庭では砂場や土山で穴を掘ったり、ご馳走をつくったり、池でエビやオタマジャクシを探す様子が見られる。この日は、オタマジャクシを2匹捕まえることに成功した。大興奮した様子で保育室へ戻ってくる子供たちであった。

かわいいね。足を発見!



みんなで育ててみたいな。

オタマジャクシは「大きくなったらカエルになるんだよ。」

<教師の思いや願い>

- オタマジャクシをお世話したり、観察したりしながらカエルになる過程に気づき、興味をもったりする活動を通して春の自然にも関心をもってほしい。
【事象への関心、命を大切に】
- オタマジャクシをつかまえた子供だけでなく、みんなにも興味や関心をもってもらいたいため、降園活動のとき、みんなに紹介しよう。【共有】

<環境構成と教師の手立て>

- みんなが見やすい場所に水槽を置く。
- 図鑑をすぐ見せずに、子供たちが調べたくなってきたときに自分で調べられるように気付く場所に置く。
- みんなで飼うかどうかの話合いの場を設け、興味や関心をもつことができるようにする。

図4 新しい出会いがある環境の構成例

(3) 発達の時期に即した環境

幼児は発達に応じて環境への関わり方が異なる。そこで、シャボン玉遊びを例に紹介する。年少児では、膨らます楽しさに興味がある幼児が、体験を重ねたり成長したりするにつれて、大きなシャボン玉、たくさんのシャボン玉など試したり工夫したりすることなどにも興味をもつようになる。そこで、発達の時期に即した環境構成の工夫が必要となる(図5)。

事例3⁸⁾ 「シャボン玉での遊び」

	年少児	年長児
幼児の姿	シャボン玉を膨らませたい。」、「きれいだな。」など、シャボン玉を自分で膨らませる楽しさや面白さ、シャボン玉の美しさを感じながら遊ぶ。	「どうしたら大きなシャボン玉ができるかな。」、「吹き棒の先を変えたらたくさんシャボン玉ができるかな。」など、いろいろな予想を立てたり確かめたりしながら遊ぶ。
環境構成の工夫	膨らみやすいシャボン玉液や吹きやすい吹き棒、持ちやすいカップなどを用意して、「やってみよう。」と思う幼児がすぐできるようにする。	幼児が工夫したり試したりしながら、シャボン玉液や吹き棒等を作ったり吹いたりできるように様々な素材を用意する。 気付いたことや考えたことなどを友達と伝え合い、共感し合ったり認めたりできるように援助する。

図5 発達の時期に即した環境の構成例

このように、幼児が自ら関わりたくなるような環境を構成することで、主体的な活動は始まる。「学びの芽生え」の時期といわれる幼児期は、楽しいことや好きなことに集中して活動することを通じて学んでいる。その学びは、自発的な遊びから生じるものであり、その幼児期の学びを支えているのが、幼児の姿を基に教師により意図的・計画的に構成された環境である。

6 おわりに

幼児期にどのような環境に関わり生活してきたかは、将来にわたる心身の発達や生き方などにも大きく影響する。そのため、幼児教育は、幼児が様々な環境と関わることを通じてその発達を促す意図的な教育であり、教師が教育的に価値のある、幼児の発達にとって意味のある環境を構成することが必要となってくる。また、幼児が主体的に活動するためには、教師だけで環境を構成するのではなく、幼児の思いや考えを取り入れて、幼児と一緒に構成する余地のある環境の構成も求められている。

幼児一人一人が、主体的に関わり、夢中になって活動する魅力的な環境の構成を行うために、各園の実態と幼児の生活の姿を踏まえながら環境の構成を工夫し、更によりよい保育が展開されていくことを期待する。

一引用・参考文献一

- 1) 幼稚園教育要領(平成29年) 文部科学省 株式会社 フレーベル館
 - 2) 幼稚園教育要領解説(平成30年) 文部科学省 株式会社 フレーベル館
 - 3) 幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年) 文部科学省 株式会社 チャイルド本社
- 保育の質の向上につながるカリキュラム・マネジメント【2年次:環境構成】(令和3年) 鹿児島大学教育学部附属幼稚園研究誌

(教職研修課 林 智美)

⁷⁾ 鹿児島大学教育学部附属幼稚園

⁸⁾ 幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開